

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(三十五点)

新聞の上に羽アリが一匹。左右の脚のバランスが悪いのか、あっちに進んだかと思うと、くるくる回って、またこっちにもどる。ちよど体調不良が続いて悶々としていた時期だったので、①右□左□するアリに自分を重ねてしまった。運の悪いことに、そこは*株式欄。数字の海ですっかり迷ってしまったアリだ。えんえんと続く数字の列に、白や黒の三角印が時折あらわれる。△を道しるべに前に進むと、▼があってもどらなければならぬ。アリの目線で変な空想をしていたら、じわじわとおかしくなってきた。人間の迷いも、大きな視点から見たら、所詮こんなものなのだろうと思えた。

悩んだとき、いきづまったとき、自分の視点から少しはなれるだけで、気持ちが悪くなることもある。いま自分に見えているのは、世界のほんの一部にすぎない。ちっぽけな視界の外側に大きな世界の存在を感じると、やはりほっとするのだ。

視点を変えると、世界はまるでちがって見える。そのおもしろさに気づいたのが、高校生のときの数学の問題だ。種類の異なる十二個のケーキをA、B、C、Dの四人で分けたい。一人で全部食べてしまう人がいても、まったく食べない人がいてもよい。その分け方は何通りあるか。

あまりに不平等だし、ケーキ十二個はさすがにきついなと思いつながら、まずはaスナオに考えた。たとえばA、B、Cの三人がともに0個なら、Dが全部食べるしかないので、一通り。A、Bが0個、Cが1個の場合、Cが十二個のうちどの1個を食べるかで決まるので、十二通り(Dは残りもの)。A、Bが0個、Cが2個の場合、Cが十二個のうちどの2個を食べるか決まるので……。

こうして一つひとつ場合分けすればいいけれど、②ほんのさわりを書き出しただけでもこの調子。かなり面倒で時間もかかる。ほかの解法はないか。考えてはみるが思いつかない。宿題であてられていたので、しかたなく場合分けを試みたものの、長ったらしい解答をまた黒板に書かなきゃいけないと思うと気が重かった。いつになくおそくまで粘り、そろそろ眠気もピーク。しかたがない、あきらめて寝よう。目をつむってしばらくしたとき、ふいにひらめいた。

ケーキの立場に立つたらどうだろう。人間ではなく、ケーキの立場に立つて考える。そうすると、自分(＝ケーキ)は、A、B、C、Dのだれに食べられるかの四通りしかない。十二個のケーキそれぞれについて四通りだから、四を十二回かければよい。つまり四の十二乗通り。

どきどきして眠気も吹き飛んだ。問題が解けたこともうれしかったが、視点を変えるだけで、面倒な問題がこんなにすっきり見えるのか。③それこそ頭のなかに「！」が十二個ぐらい並んだ気分だった。

④視点を換えることは、想像力をみがくコツでもある。認知的な枠組みを解体するきっかけになるからだ。ドラマチックに視点が変わるのは自分以外の何ものかの視点に立つことだが、アリやケーキにならなくても視点を換える方法はある。

一つは見る角度を換えること。正面から、横から、上から、下から。立ち位置を換えると、別の側面が見えてくる。目線を少しずらしてフォーカスする部分を変えてみるだけでもよい。対象が大きければ大きいほど、見え方のちがいも大きい。他のモノとの関係性も、見る角度によってまったく変わってくる。

もう一つが、倍率を換えることだ。カメラのように、寄りの視点で細かい部分を見ると、引きの視点で全体をとらえるのでは、まるでちがう。実際に近づいたり遠ざかったりするのが一番効果的だが、目のつかい方次第でも見え方は変わってくる。

(中略)

作品を鑑賞するときにも視点を換えてみるとおもしろい。ぱっと見だと、全体的な視点からテーマが「何か」を認識するだけで終わってしまう。でも一つの作品を、遠くから、近くから、斜めから、動きながら、人の邪魔にならない程度に視点を換えてみると、「！」が見えることが多い。筆跡などの部分に注目したり、全体をながめたりを繰り返すと、作者の視点を追体験する気分も味わえる。

たとえば*セザンヌのリンゴなら、手前の方の一つのリンゴにぐっとフォーカスして見るとおもしろい。そのまま少しだけ動くと、視点を中心に立体的な空間がたちあがってどきっとしたりする。

いっぽう*モネの睡蓮は、画面よりも遠くにピントを合わせて、ぼんやりながめるのが好きだ。うつろな目で見ていると、睡蓮が水面にbハンシヤする境界のあたりから空気感のある空間がたちあがって、むしろ写実絵画以上にリアルに感じることもある。近寄ると、絵の具が荒くのっているだけなのに不思議だ。

これまで、理学、医学、芸術学、教育学と、立ち位置のはなれた分野に身を置いてきた。この右□左□した経歴のなかで実感したのは、分野ごと、人ごとにさまざまな視点があり、そこから見える景色がまるでちがうということだ。一つの視点を追求することは、ときにはルーペや顕微鏡までつかって見るようなもの。詳細が見えてくるほど、それが絶対的な視点だと錯覚してしまう危うさもある。

ときには木を見たり、森を見たり、自在に視点を変えられる目を持つていたい。同時に複数の視点を持つことはできないから、見えないう視点を補う想像力も必要だ。そして⑤アートこそ、柔軟な目を養う一番の方法かもしれない。

森のなかで見上げると、葉っぱの一枚いちまいが青空に透けて心地よく揺れている。その木漏れ日は林床まで届き、瞬間ごとに移りゆく。モヨウを描く。光と影のゆらめきに目をこらすと、二ミリほどの*実生がつんと立ち、その周りをアリが忙しそうに歩いている。実際のところ、アリの目に、この世界はどう見えているのだろうか。

(齋藤亜矢「木を見る、森を見る」岩波書店)

*注 株式欄⇨新聞の株式欄は、株価の上下を△や▼などの記号で表している。

セザンヌ⇨ポール・セザンヌ(一八三九〜一九〇六)。フランスの画家。後期印象派の巨匠。

モネ⇨クロード・モネ(一八四〇〜一九二六)。フランス印象派の代表的画家。

実生⇨植物の芽。

問一 a c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 線部①の に同じ漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

問三 — 線部②の「さわり」は、本来「核心部分」という意味の言葉ですが、「物事の取っかかり」という意味で誤用されるとしばしば言われます。これと同じように、本来とは異なる意味で用いられているものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「情けは人のためならず」——「人に情けをかけておくと、めぐりめぐって自分に良い報いが来る」

イ 「気が置けない人」——「いっしょにいて気詰まりではない、気をつかわなくてよい人」

ウ 「慥然とする」——「失望してぼんやりする」

エ 「姑息だ」——「卑怯だ」

オ 「隣の芝生は青い」——「他人のもの、自分のものでないものは、同じものでもよく見える」

問四 — 線部③での筆者の心情を具体的に説明しなさい。

問五 — 線部④について、

(1) ここでの「想像力」とは、何を想像する力を言っていますか。本文中の語句を用いて答えなさい。

(2) 筆者は「認知的な枠組みを解体する」べきだと考えていますが、それはわたしたちにどのような傾向があるからですか、説明しなさい。

問六 — 線部⑤のように言うのは、筆者がアートをどのようなものだと見ているからですか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世界の一部分が切り取られた作品を通して、作者と鑑賞者が大きな空間の存在と時間の流れを共有し得るもの。

イ 対象となった事物の最も輝かしい部分を提示することで、鑑賞者に現実世界のすばらしさを再確認させるもの。

ウ 一瞬の光景をそのまま作品のうちに凝縮することにより、時代や社会に影響されない普遍的な美を表現したもの。

エ すぐれた描写や技巧によって鑑賞者を美の世界に誘いながら、作品にこめられた作者の意図を考えさせるもの。

オ ささまざまな創意工夫をほどこしながら作品を完成させることによって、作者が他と異なる独自の世界観を示したもの。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(六十五点)

主人公の「遼子」は小学五年生である。「美音」とは幼なじみで、保育園からずっといっしょである。クラスがえの結果、二人とも四年生の時仲が良かった友達とはクラスがちがってしまった。

その日登校すると、クラスでちよつとした問題が持ち上がった。①黒板に大きく美音と柗介の名前が書いてあり、二人の名前の間にハートマークが描いてあったのだ。

美音が目をやると、美音は机につつぷしていた。もしかして泣いているのではないかと危ぶんだけれど、美音は鼻までを腕の間に隠し、目だけをA出してあたりを見回していた。クラスの様子をうかがっているらしい。わたしと目が合った。わたしはa「カンネン」して、美音のところに行った。

「おはよう」

「おはようじゃないわよ。黒板見た？」

「うん、見たに決まってる」

「もうやだ、誰があんなこと書いたのよ」

そう言いつつ、本気で怒っているわけではなさそうだった。長年の付き合いだから、それくらいわかる。

「消してこようか」

わたしが言うと美音はあらぬほうを向いて、小さくため息をついた。

黒板の文字は目立っていて、おそらくすでに登校したみんなは目にしたはずだけれど、クラス内はいつもとほとんど変わりなかった。ひかえめにさわいでいるのは、真帆たちのグループだけだ。他の女子たちは、黒板を一瞥してそれで終わり。肝心の柊介がまだ来っていないので、男子たちも特にさわいでいない。

「なんか、しずかだね」

わたしが言うと、美音はふいと顔をそむけた。

「きつと、真帆たちのしわざだと思う。真帆は柊介のことが好きだから、わたしと柊介が仲いいのが悔しいんでしょ」

「だったら、ハートじゃなくてばってんマークとかにすればいいのにねえ」

美音は一瞬Bして、それから、

「つたくもう！ 遼子と話していると調子くるう！」

と言って、バンツと机をたたいた。

しばらくして、柊介が登校してきた。柊介は黒板を見た瞬間耳を赤くして、すぐさま黒板消しをつかんで、猛然と黒板の字を消しはじめた。

「誰だよっ！ ざけんな！」

大きな声だったので、みんなが一斉に柊介を見た。けれどそのあと、柊介はなにと言わないで席に着いたので、みんなもそれきりだった。真帆たちだけが、くすくすと笑っていた。

と、そのとき美音がいきなり立ち上がった。真帆たちのほうへずんずんと歩いていく。

「ちよつと！」

美音の大きな声に、クラス全員がCした。

「黒板に書いたの、あんたたちでしょ！」

さらに大きな声で、美音が言った。

「はあ？ なに言ってるの」

「いきなりなんなの？」

「なんで決めつけてるの？ へんなの」

真帆たちが口々に言う。

「真帆は、柊介のことが好きなんでしょ！」

美音がクラス中に聞かせるように言ったので、今度はみんなが一斉に真帆のほうを見た。真帆は顔を真っ赤にして直立のまま動かなくなつたけれど、突然、わあつ、と顔をおおって、泣き出した。教室中がしんと静まる。

「真帆が書いたって証拠あるの!？」

真帆のいちばんの友達の桐子が言って、美音につめ寄った。

「あ、あるわ。真帆が書いているところ、わたし、見たもん」

「いつ？」

「今日の朝」

「何時？」

「時計を見てないから、そんなのわからない」

真帆たちは顔を見合わせた。

「うそつき！」

「うそじゃない。本当に見たもん」

「じゃあ、なんでその場で言わないのよ」

「……だって、こわかったし」

② 桐子は目をむいて「こわい!?」と頓狂な声を出し、

「こわいとか言って、かわいこぶる女、大っきらい！」

と言った。桐子とはあまり話したことはないけれど、今の意見には**サンセイ**だ。

「美音、うそつくのもいいかげんにしなよ！ 真帆は今日、わたしといっしょに登校したんだよ。真帆の家に寄ってから二人で学校に来たの。わたしたちが登校したときは、もう黒板に名前が書いてあった。だから真帆は書いてないっ！」

桐子の言葉に美音はなんの反論もせず、まるで聞こえなかったみたいに見無視して席にもどった。

「なんでなにも言わないのよ！ うそつき！ サイテー！ 真帆にあやまりなよ！」

美音は知らんぷりして頬杖をついていた。不穏な空気のままチャイムが鳴って、浅野先生がやって来た。朝の会の間も、真帆はハンカチを目にあてていて、一方の美音はつまらなそうに頬杖をついたままだった。

一時間は道德の時間だった。普段は教科書通りに進んでいくのだけれど、今日はちがった。桐子が手を挙げたのだ。

「先生、今日の道德の時間はクラスメイトのことについて相談したいんですけど、いいですか」

浅野先生は、おおげさに目を見開いて、「あらっ」と言った。

「どんなことでしょうか？」

「今日の朝、黒板に美音さんと柘介さんの名前が書いてあって、その間にハートマークが描いてあったんです」

「あらあ、そうだったの」

先生は、口をひよつとこみたいにさせた。真帆が泣いているのには気付いていたと思うけれど、こういうとき浅野先生は自分からはなにも言わない。それがいいのか悪いのかは、わからない。

もしわたしが泣いていたとしたら、先生に声なんてかけてほしくないけれど、きっと真帆は先生に声をかけてもらいたいタイプだと思う。三十三人のクラスメイト全員に合った答えなんてないよなあと思う。先生って大変だ。

桐子が美音をきつくにらむ。

「美音さんは、それを書いたのを真帆さんのせいにしました。【I】わたしが証人です。【II】 【III】 【IV】」
濡れ衣を着せる！ わたしは、内容うんぬんよりも桐子の言葉に興奮した。濡れ衣を着せるだなんて、そんな言葉これまで使ったことはなかったし、実のところ、ちゃんとした意味も知らなかった。

わたしはノートをちぎって、「ぬれぎぬ！」とひとこと書いて、前の席のよっちゃんに回した。よっちゃんはメモを見たあとなにやら書きこんで、後ろ手でわたしの机の上にメモをもどした。

―無実の罪を**オ**わすこと。由来は**d**シヨセツあって定かではない―

そう書いてあった。さすがよっちゃんと思つて、わたしは一人深くうなずいた。

「美音さんはどうしたいですか？」

先生が美音を見てたずねた。美音は下を向いたままだ。

「真帆さんはどうですか？」

先生が今度は真帆にたずねた。

「……あやまってほしいです。わたしは書いてないです」

真帆が涙声で言う。

「じゃあ、いったい誰が書いたんだよっ！」

と、いきなり声をあげたのは柘介だ。顔を真っ赤にさせている。真帆が肩をびくつとさせ、また泣き出した。美音の言う通り、真帆は柘介のことが好きなのかもしれない、とわたしはひそかに思った。

「犯人さがしはやめませんか」

先生が穏やかな口調で言う。

「柘介さんと美音さんは、黒板に書かれていやな気分になりましたか」

先生が続けた。柘介がうなずき、美音も小さくうなずいた。

「誰かがいやな気分になることをするのは、いけないことですよ。もし、このクラスのなかに黒板に書いた人がいるならば、今度からは二度としないようにしてください」

クラスのみんなそれぞれが、先生の言葉に神妙にうなずく。誰かがいやな気分になることは全部イジメなんだと、これまで何度も言われてきた。

けれど、それってものすごくむずかしいことだとわたしは思う。いやな気分にも度合いというものがある。人によって、いやなことは

みんなちがうはずだ。誰かにとつてはいやなことでも、誰かにとつてはいやなことではないかもしれない。この世の中にいる誰かにとつてのいやなことを言わないようにしたら、誰もなんにも話せなくなつて、言葉は消えてしまう。

「先生！」

桐子が手を挙げた。

「でもとにかく、美音さんは真帆さんにあやまるべきだと思います。犯人にされた真帆さんこそ、ものすごくいやな気分になつたはずです。聞いていたわたしも、とてもいやな気持ちになりました」

桐子が言った。わたしは、桐子ってすごい子だったんだ、と改めて思った。いつも真帆たちとファッションやメイクの話ばかりしているので、そういう、なんというか、外見だけに一生懸命な女子だと思つていた。こんなふういきちんとはつきりと、みんなの前で自分の意見を堂々と言えるなんてすごい。

ふと視線を動かすと、前のほうの席に座っている四葉ちゃんが顔を後ろに向けて、美音を **D** 見つめていた。美音も気が付いたように、四葉ちゃんを見つめ返している。なんだろう？　と思つて二人の様子をながめていると、美音が急に立ち上がった。みんなが **E** して美音を見る。

「真帆さん、ごめんなさい。真帆さんが書いていたのを見たつていうのはうそでした。ごめんなさい」

突然そう言つて、頭を下げたのだった。急展開だ。

「真帆さん。美音さんがあやまりました」

先生が言う。真帆はひとつ小さくうなずいて、「……じゃあ、いいです」と言った。

「桐子さんも納得できましたか」

桐子はしぶしぶという感じだったが、わかりました、と返した。

そのあと教科書を使った道德の授業をして、一時間目は終わった。休み時間、わたしは **E** イチモクサンに桐子のところに行つて、

「桐子ってすごいね。かつこいいよ」

と伝えた。

「はあ？　急になに言つてるの」

③ 桐子は、不審そうな表情でわたしを見た。

「見直しちゃった」

「なに、見直したつて。なんで上から目線なのよ？」

そう言つてちよつと笑つた。まんざらでもなさそうだった。

そのあとで美音のところに行つたら、「なんですぐに来ないのよ」と、にらまれた。

「友達でしょ」

「うん」

「すぐに来るのが友達じゃない？」

「他の用事があったから」

「桐子としゃべつてたじゃない」

「うん！　桐子ってかつこいいなあと思つてさ。あんなふうに、しっかりと自分の意見を言えるなんてすてきだよ。それに濡れ衣を着せられて、つて言つたんだよ。すごい言葉を知つてるよねえ」

美音はぎろつとわたしをにらんで、信じられない！　と大きな声を出した。

「道德の時間、わたしがどんな気持ちだったかわからないの？」

そう問われてわたしは、

「ちゃんとあやまることができよかつたね」

と言つた。④ 美音は顔を赤くして、むかつく！　と叫んで、そっぽを向いた。

「ねえ、それより、さっき四葉ちゃんが美音のこと、じいっと見つめてたでしょ？　あれ、なんだつたの？」

美音はむかついた顔のままだったけれど、仕方ないなあ、と前置きして答えてくれた。

「よくわからないんだけどさ。あやまつたほうがいいよ、つて四葉ちゃんが言つてるような気がしたの」

「なにそれ。もしかして超能力つてこと？」

「以心伝心つてやつ？　こないだ国語の授業で習つたよね、以心伝心」

へえ！　と感心してしまつた。やっぱり四葉ちゃんってすごい子だ。

「ねえ、美音。今日、四葉ちゃんと遊ばない？」

「えー、どうしようかな」

「じゃあ、美音は来られたら来なよ。わたし、あとで四葉ちゃんに聞いてみる」
「ちよ、ちよっと！ わたしもいっしょに遊ぶよ！ 決まってるでしょ！」

あわてた様子で美音が続けた。
放課後、わたしは四葉ちゃんに声をかけてみた。

問一 a のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A E に入る言葉として適切なものを、次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ言葉は二度以上使ってはいけません。

ア びくつと イ ぎろつと ウ ぎよつと エ じいつと オ ぼかんと カ じろじろと

問三 「I」～「IV」には次の発言が入ります。筋が通った内容になるように並びかえ、それぞれ記号で答えなさい。

ア 美音さんは真帆さんにきちんとあやまるべきだと思います！

イ 理由は、わたしといっしょに登校したときには、すでに黒板に書いてあったからです。

ウ でも、真帆さんは書いていません。

エ 真帆さんはみんなの前で、美音さんに濡れ衣ぬれぎぬを着せられて泣いてしまいました。

問四 ——線部①の出来事に対する「遼子」と「美音」の心情の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「遼子」は周囲の中傷を受けている「美音」のことが心配で、幼なじみの自分がなぐさめてやらなければならぬと思った。

イ 「美音」はショックを受けている様子を周囲に見せながら、「遼子」とともに誰が落書きをしたのかさぐるうと思っていた。

ウ 「遼子」は「美音」の様子が気になっているものの、自ら声をかけて「美音」に接しようと思っているわけではなかった。

エ 「美音」はクラスの中で孤立こりっしていることを知り、ただ一人自分を理解してくれる親友の「遼子」に救いを求めていた。

オ 「遼子」はクラスメイトの「美音」をからかって楽しむような雰囲気ふんいきがクラスにあることを知って、強いいきどおりを感じた。

問五 ——線部②の様子から、「桐子」は「美音」のことをどのように思っていることが分かりますか、説明しなさい。

問六 ——線部③での「桐子」の心情を説明しなさい。

問七 ——線部④での「美音」の心情の説明として、適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「遼子」が「桐子」と話した内容を楽しそうに語ったことに、「美音」は自分に対して気づかいを見せない「遼子」の鈍感どんかんさを感じ、いらだっている。

イ すなおにあやまることで、その場が収まってよかったという「遼子」の言葉に、「美音」は自分の内面を見すかさされたようなはずかしさを感じている。

ウ 自分のうそをまったく責め立てることのない「遼子」の様子に、「美音」は友達ともだちの存在をありがたさを感じつつも、照れかくしの行動をとっている。

エ 「遼子」が自分と対立した「桐子」をすてきだと評価した点に、「美音」は「桐子」に比べておろかだしってきと指摘されたように思い、「遼子」へのいかりがこみ上げている。

オ 「四葉」と遊ぶという「遼子」の提案に後で気軽に応じる「美音」は、表面的には「遼子」への腹立ちを見せながらも、内心では今回の問題の解決を喜んでいいる。

問八 この話の登場人物のように、私たちは様々な友達と付き合い合わなければなりません。では、あなたなら気が合わない人とはどのようにして付き合っていきますか。三百字以内で書きなさい。

国語 解答用紙 (その二)

一

a
b
c

問一

--

問二

--

問三

--	--	--	--	--

問四

--

問五 (1)

--	--	--	--	--

(2)

--

問六

二

d	a
e	b
	c

問一

A
B
C
D
E

問二

I
II
III
IV

問三

--

問四

--

問五

--	--	--	--	--

問六

--

問七

得点	

受験番号	
------	--

国語 解答用紙 (その二)

二

問八

A large grid for writing answers, consisting of 20 columns and 25 rows of small squares. A vertical margin line is present on the left side, creating a narrow column for writing. At the bottom of the grid, there are numerical markers: '300' at the far left, '200' at the 10th column, and '100' at the 20th column.

300

200

100

受験 番号	
----------	--